

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520469

研究課題名(和文) 文頭における自立語化および文の外縁部の構造に関する研究

研究課題名(英文) A Study on Debonding in the Sentence-Initial Position and the Structure of the Sentential Periphery

研究代表者

那須 紀夫(Nasu, Norio)

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：00347519

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、文頭における助詞の残留現象を研究対象とし、この現象を可能にする統語的・談話的条件を解明するとともに、文の外縁部の統語構造を明らかにすることを試みた。その結果、次のことが明らかになった。文頭の残留助詞は、終助詞などの文末形式と同類の談話構成機能を持つ。この類似性は、問題となる文頭・文末の形式が句構造上同一の階層に属していることに起因している。その点で助詞残留は文の外縁部が統語と談話の接点を形成していることを示唆する現象であると言える。

研究成果の概要(英文)：This study deals with particle stranding in the sentence-initial position. It aims at explicating syntactic and pragmatic conditions underlying this phenomenon. It also attempts to clarify the syntactic structure of peripheral parts of a sentence. The following results have been obtained. A stranded particle in the initial position shares discourse-constructing functions with sentence-final elements such as sentence-final particles. Their similarities are rooted in their occurrence in the same layer in phrase structure. Particle stranding, in this respect, indicates that the sentence periphery forms an interface between syntax and discourse.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：言語学 統語論 文頭 カートグラフィー 主節現象

## 1. 研究開始当初の背景

日本語では、文頭の形式と文末の形式が呼応することが、しばしば指摘されている。このような対応関係が指摘されながら、文法研究における両者の扱いは均等ではなく、文末形式の特徴や機能についての詳細な記述が進む一方、呼びかけ、文頭の接続詞、間投詞のような文頭形式の文法上の地位に関しては、まだ検討の余地が残されている。

生成文法においても、文頭形式の統語構造上の位置づけは明確ではなく、これらは統語計算機構に属する現象というよりは、むしろ文体論や語用論で処理されるべき現象であるとされ、文構造に関する中核的な議論の域外に置かれる傾向がある。

しかし、1990年代半ばから始まったカートグラフィー研究では、文の外縁部分で起こる文法現象の研究が進み、それまで例外とされることの多かった現象が統語論の一般原理に従うとの指摘がなされてきた。

とりわけ本研究と関連が深いのは、文の外縁部に表出する要素の分布が句構造の一般的特性である指定部・主要部の一致関係に還元できるという着想である。この考え方の中では、文の外縁要素およびそれに一致する主要部は、談話解釈と関わりのある素性を共有することになる。これは、文頭と文末の形式が呼応関係を結ぶという日本語の記述研究における観察と重なるものである。指定部・主要部の一致関係が文の外縁部でも規則的かつ体系的に見られるものであるならば、文頭での自立語化現象もこの関係を反映する現象であると予想される。本研究ではこの予想の適否を検証する。

## 2. 研究の目的

本研究は、文頭における付属語の自立語化を研究対象とする。主たる関心は、本来自立することのない付属語要素が、なぜ文頭に限って自立できるのかという点にある。

本研究では、文頭形式と文末形式の対応関係を統語と談話の両面から考察することに

よって、文頭での自立語化を可能にする条件を解明するとともに、自立語化が起こる文の外縁部の統語構造を明らかにすることを目指す。

研究の理論的枠組みとして生成文法理論、とりわけカートグラフィー研究における句構造理論を採用し、次の3つの課題に取り組むことによって、上記の目標にアプローチする。

課題(1)：文頭で自立語化する諸形式がそれぞれどのような文末形式と呼応関係を持つのか。

課題(2)：呼応関係を仲介する素性はどのような性質を持つのか。

課題(3)：文構造の他の領域では不可能な自立語化が、なぜ文頭では可能なのか。

## 3. 研究の方法

「研究の目的」の項で挙げた3つの課題に対応する形で研究を進める。

課題(1)に関して：文頭ならびに文末の形式を類別して語彙リストを作成し、文頭形式と文末形式の共起関係を調べる。文末形式に関しては日本語学における記述的研究の集積があるため、それを整理して分析対象とする形式のリストを作成する。一方文頭形式については文末形式ほど類別が進んでいないため、まずは現状把握から行う。既に収集した発話データから文頭での自立語化要素を含む発話を抽出・転記し、個々の事例の類別化を行う。

課題(2)に関して：上記のプロセスで作成したリストをもとに助詞残留が起こる環境を特定し、それと呼応する文末形式が果たす統語・談話上の役割や特性を詳細に調べる。それによって文頭と文末の呼応関係を仲介する素性の特定を行う。

課題(3)に関して：「助詞残留が主節に限定される事実は、統語現象に広く見られる局所性制約に還元される」という仮説を立て、そ

の適否を検証する。現在の極小主義理論で採用されている位相理論、とりわけ multiple spell-out の仕組みで問題の局所性が説明可能かどうかを検討する。

#### 4. 研究成果

本研究の成果は以下の通りである。

提題助詞「は」が残留する場合について、副詞節、補部節、ならびに名詞修飾節における当該形式の現れ方を吟味した結果、この現象が主節のみで可能な現象（主節現象）であることが確認された。〔課題(1)に関連〕

発話伝達を表す文末形式（終助詞など）の統語的分布ならびに談話機能を調べ、文頭の提題助詞のそれと比較した結果、いずれも主節 CP の最外縁部（発話行為句 Speech-Act Phrase）に生起すること、そしてともに話し手による聞き手への働きかけを具現化した形式であることが明らかになった。これによって両者の呼応関係が発話の対人伝達機能に関連した素性を仲介して構築されることが確認された。さらに、当該の呼応関係が句構造に反映されていること（具体的には発話行為句における指定部・主要部の一致関係に基づくこと）が明らかになった。〔課題(1)(2)に関連〕

提題助詞の残留とそれ以外の助詞の残留を比較した結果、前者とは違い、後者は発話行為句が現れる階層ではなく、それよりも下の階層に生起することが判明した。呼応する文末形式が焦点文に顕著に見られる形式「(の)だ」であることが確認されたため、当該の残留助詞が生起する階層が焦点階層（Focus Phrase）であることが明らかになった。〔課題(1)(2)に関連〕

焦点タイプの助詞残留が可能な環境を調べた結果、このタイプの助詞残留も主節現象であることが確認された。その一方で、焦点階層は主節のみならず従属節にも存在するため、なぜ従属節の焦点階層が助詞残留に利用できないのかという問題が新たに浮かび上がってきた。

この問題に対して、助詞残留が示す顕著な主節指向性は統語現象に広く見られる局所性の制約に還元されるとの仮説を立て、検証を行った。その結果は下記の通りである。

残留助詞は発話行為句の主要部によって認可される必要があるため、両者は同じ spell-out 領域に入らねばならない。そうでない場合には派生の早い段階で残留助詞が spell-out されてしまい、発話行為句主要部との認可関係の構築が不可能になってしまう。焦点タイプの残留助詞が従属節の焦点階層に生起できないのは、主節外縁部にある発話行為句が派生に導入される時点で、既に従属節が spell-out されてしまっているからである。これは、助詞残留に課される局所性制約が極小主義理論の multiple spell-out の仕組みから自然に導き出されることを示すものである。〔課題(3)に関連〕

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計5件)

NASU, Norio. 2014. "Topicalization in adverbial clauses: Toward parameterization of embedded root effects." 『神戸外大論叢』64.1: 61-84. 神戸市外国語大学. 査読無.

NASU, Norio. 2013. "What makes root phenomena special?" *Formal Approaches to Japanese Linguistics* 6: 109-120. Cambridge, Mass.: MIT Working Papers in Linguistics. 査読無.

那須 紀夫. 2012. 「助詞残留が起こる文頭の位置について」*CLAVEL* 2: 1-12. 対照研究セミナー. 査読無.

NASU, Norio. 2012. "Topic particle stranding and the structure of CP" In Lobke Aelbrecht, Liliane Haegeman, and Rachel Nye (eds.) *Main Clause Phenomena: New Horizons*. 205-228. Amsterdam: John Benjamins Publishing

Company. 査読有 .

那須 紀夫. 2011. 「文の外縁部を構成する要素について」 *Proceedings of the Kansai Linguistic Society* 31: 310-321. 関西言語学会. 査読有 .

〔学会発表〕(計2件)

NASU, Norio. 2012. “Particle stranding in Japanese: Focus, speech acts, and the CP-phase.” *Japanese Korean Linguistics* 22. 2012年10月12日. 東京：国立国語研究所.

NASU, Norio. 2012. “What makes root phenomena special?” *Formal Approaches to Japanese Linguistics* 6. 2012年9月26日.ベルリン：在独日本大使館・フンボルト大学.

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

該当なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

那須 紀夫 (NASU, Norio)  
神戸市外国語大学・外国語学部・准教授  
研究者番号：00347519

(2)研究分担者

該当なし

(3)連携研究者

該当なし